

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

全
集

別
卷

別
卷

鏡花全集 別卷 第二十九回配本(全二十九卷)

定價三千二百圓

昭和五十一年三月二十六日 第一刷發行

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

〒101 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

電話 (03) 341-4222

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 泉 名 月 1976

目次

補遺

琵琶傳	(明治二十九年一月)……………	三
海城發電	(明治二十九年一月)……………	三
妖劍紀聞	(大正九年一月)……………	六
定九郎	(大正十年一月)……………	一五
會津より	(明治三十二年八月)……………	一五
本郷座の高野聖に就て	(明治三十七年十月)……………	一六
描寫の上より見たる犯罪	(明治四十二年十一月)……………	一六
拔萃帖から	(明治四十五年四月)……………	一六
幼い頃の記憶	(明治四十五年五月)……………	一七

なつかしい「蛙」のはなし（大正十四年四月）……………一七五

三十銭で買へた太平記（大正十五年十一月）……………一七七

熱い茶（昭和二年六月）……………一七九

新潮合評會（大正十四年四月）……………一八一

泉鏡花座談會（昭和二年八月）……………一八三

泉鏡花と梅村蓉子（昭和三年一月）……………一八五

原作者の見た「日本橋」（昭和四年四月）……………一八七

書簡……………二七九

書簡下書……………三三五

参考篇

飛縁魔物語……………四〇一

次 目

白鬼女物語	四〇三
× + ×	四一四
墓参の記	四一五
黒壁	四一七
ほたる	四二三
第八大吉	四二六
薦太郎	四三二
鮎の牲	四三八
他流仕合	四四一
玉章びき	四四三
競争小話	四四八
昔馴	四五〇
紅の記	四五七
新泉奇談	四六七

泉鏡花自筆原稿目錄	慶應義塾圖書館藏	六二七
-----------	----------	-----

〔參考資料〕春陽堂版鏡花全集卷一所收 泉鏡花年譜		七二七
--------------------------	--	-----

泉鏡花作品年表補訂		七三五
-----------	--	-----

作品解題	(村松定孝)	七三三
------	--------	-----

後記	(村松定孝)	八七五
----	--------	-----

總目索引		
------	--	--

補

遺

琵琶傳

一

新婦が、床杯をなさむとて、座敷より休息の室に開きける時、介添の婦人は不圖其顔を見て驚きぬ。

面貌殆ど生色なく、今にも僵れむばかりなるが、ものに激したる状なるにぞ、介添は心許なげに、つい居て着換を捧げながら、

「もし、御氣分でもお悪いのぢやございませんか。」

と聲を密めてそと問ひぬ。

新婦は凄冷なる瞳を轉じて、介添を顧みつ。

「何。」

とばかり簡單に言捨てたるまゝ、身さへ眼をさへ動かさで、一心唯思ふことある其一方を見詰めつゝ、衣を換ふるも、帶を緊むるも、衣紋を直すも、襷を揃ふるも、皆他の手に打任せつ。

尋常ならぬ新婦の氣色を危みたる介添の、何かは知らずおどししながら、

「此方へ。」

と謂ふに任せ、渠は少しも躊躇はで、靜々と歩を廊下に運びて、やがて寢室に伴はれぬ。

床にはハヤ良人ありて、新婦の來るを待ち居れり。渠は名を近藤重隆と謂ふ陸軍の尉官なり。

式は別に謂はざるべし、媒妁の妻退き、介添の婦人皆罷出つ。

唯二人、閨の上に相對し、新婦は屹と身體を固めて、端然として坐したるまゝ、まおもてに良

人の面を瞻りて、打解けたる状態もなく、はた恥らへる風情も無かりき。

尉官は腕を拱きて、こもまた和きたる體あらず、殆ど五分時ばかりの間、互に眼と眼を見合せ

しが、遂に良人先づ肅びたる聲にて、

「お通。」

とばかり呼懸けつ。

新婦の名はお通ならむ。

呼ばるゝに應へて、

「唯。」

とのみ。渠は判然とものいへり。

尉官は太く苛立つ胸を、強ひて落着けたらむ如き、沈める、力ある音調もて、

「汝、よく娶たな。」

お通は少しも口籠らで、

「何うも仕方がございませぬ。」

尉官は少時黙しけるが、稍其聲を高うせり。

「おい、謙三郎は何うした。」

「息災で居ります。」

「よく、汝、別れることが出来たな。」

「詮方がないからです。」

「何故詮方がない。うむ。」

お通はこれが答をせて、懷中に手を差入れて一通の書を取り出し、良人の前に繰廣げて、兩手を膝に正してき。尉官は右手を差伸し、身近に行燈を引寄せつゝ、眼を定めて讀みおろしぬ。

文字は蓋し左の如きものにてありし。

お通に申残し参らせ候、御身と近藤重隆殿とは許嫁に有之候

然るに御身は殊の外彼の人を忌嫌ひ候様子、拙者の眼に相見え候へば、女ながらも其由のいひ聞け難くて、臨終の際まで黙し候

さ候へども、一旦親戚の儀を約束いたし候へば、義理堅かりし重隆殿の先人に對し面目なく、今さら變替相成らず候あはれ犠牲となりて拙者の名のために彼の人に身を任せ申さるべく、斯の遺言を認め候時の拙者が心中の苦痛を以て、御身に謝罪いたし候

月 日

清川 通知

お 通 殿

二度三度繰返して、尉官は容を更めたり。

「通、吾は良人だぞ。」

お通は聞きて兩手を支へぬ。

「唯、貴下の妻でございます。」

爾時尉官は傲然として俯向けるお通を瞰下しつゝ、

「吾のいふことには、汝、屹と従ふであらうな。」

此方は頭を低れたるまゝ、

「否、お従はせなさらなければなりません。」

尉官は眉を動かしぬ。

「ふむ。しかし通、吾を良人とした以上は、汝、妻たる節操は守らうな。」

お通は屹と面を上げつ、

「いゝえ、出来さへすれば破ります。」

尉官は怒氣心頭を衝きて烈火の如く、

「何だ！」

と其言を再びせしめつ。お通は怯めず、臆する色なく、

「はい。私に、私に、節操を守らねばなりませんと謂ふ、そんな、義理はございませんから、出

来さへすれば破ります！」

恐氣もなく言放てる、片頬に微笑を含みたり。

尉官は直ちに頷きぬ。胸中豫めこの算ありけむ、熱の極は冷となりて、ものいひもいと靜に、

「應、屹と節操を守らせるぞ。」

渠は唇頭に嘲笑したりき。

二

相本謙三郎は唯一人清川の書齋に在り。當所もなく室の一方を見詰めたるまゝ、默然として物思へり。渠が書齋の椽前には、一個數寄を盡したる鳥籠を懸けたる中に、一羽の純白なる鸚鵡あ

り、餌を啄むにも飽きたりけむ、もの淋しげに謙三郎の後姿を見遣りつゝ、頭を左右に傾け居れり。一室寂たること頃刻なりし、謙三郎は其清秀なる面に鸚鵡を見向きて、太く物案する状なりしが、憂ふる如く、危む如く、はた人に憚ることあるものゝ如く、「琵琶」と一聲、鸚鵡を呼べり。琵琶とは蓋し鸚鵡の名ならむ。低く口笛を鳴すとひとしく、

「ツウチヤン、ツウチヤン。」

と叫べる聲、奥深きこの書齋を徹して、一種の音調打響くに、謙三郎は愁然として、思はず涙を催しぬ。

琵琶は年久しく清川の家に養はれつ。お通と渠が従兄なる謙三郎との間に處して、巧みに其情交を暖めたりき。他なし、お通が此家の愛女として、室を隔てながら家を整したりし頃、未だ近藤に嫁がざりし以前には、謙三郎の用ありて、お通に見えむと欲することある毎に、今しも渠がなしたる如く、籠の中なる琵琶を呼びて、爾く口笛を鳴すとゝもに、琵琶が玲瓏たる聲をもて、「ツウチヤン、ツウチヤン。」と傳令すべく、よく馴らされてありしかば、此時の如く聲を揚げて二たび三たび呼ぶとゝもに、帳内深き處肅として物を縫ふ女、物差を棄て、針を措きて、直に謙三郎に來りつゝ、笑顔を含すが例なりしなり。

今やなし。あらぬを知りつゝ謙三郎は、日に幾回、夜に幾回、果敢なきこの兒戲を繰返すこと